

学位論文題名

美術教育における制作過程から見た自己理解の探求

- コラージュ画制作経験調査の検討から -

学位論文内容の要旨

序章 問題と目的

美術教育の目的を学習指導要領では「表現及び鑑賞の幅広い活動を通じて、美術の創造活動の喜びを味わい・美術の基本的能力を伸ばし、豊かな情操を養う」としている。これに対して本論は、教育現場ではすでに目標とされているが、美術教育がより広範な教育の目標である「生きる力」を育むことにつながる自己理解を担う教育であることを明らかにするものである。そのために本論では、コラージュ制作経験調査を実施し、その分析と考察結果を通じて、身体的制作行為がどのように作品を作り、その作品が自分の意図を超えてどのように新しい自己理解につながる経験となるかを解明する。

第Ⅰ章 分析枠組み

本調査結果の分析と考察のために、まず自己表現と自己理解の関係における理論的視点を参照し、筆者自身の制作経験から制作者と作品および鑑賞者の関係を巡る問題を整理した上で、アンリ・ワロン (Wallon, Henri) の発達論、ポール・リクール (Ricoeur, Paul) の物語論、モーリス・メルロ＝ポンティ (Merleau-Ponty, Maurice) のスタイル論を主に参考にしながら、制作行為と作品と自己理解の関係を明らかにする分析枠組みを提示した。

美術教育の制作過程という捉えどころのない時間的経験は、語ることによって記述し、表すことができる(リクールの物語論)。その語りの中に次のような3人の私が登場する。第1の私は、身体的行為と内的手本との対話的やりとりから生まれるズレと修正(相互変化)によって制作を進める第1の私である(ワロンの発達論)。この第1の私から生活する第2の私を見つけることができる。それは作品受容の中で、制作全体を語る第3の私が自分の制作や作品の独特なスタイルを見つけ(メルロ＝ポンティのスタイル論)、その制作・作品スタイルを隠喩として創造的に解釈することによって(リクールの創造的解釈による意味論的革新)、自分の生き方においても制作・作品スタイルとどこか似ている生きるスタイルを持った第2の私に気付くことによる。このように、制作・作品スタイルを創造的に解釈することで、自分の意図を超えた意味や無意識に迫る中で、生活する第2の私を見つけることになり、自己理解へと繋がる。

第Ⅱ章 コラージュ画制作経験調査

コラージュ画制作経験調査は、20～30歳前後の調査協力者12人それぞれにコラージュ画を制作してもらい、制作後調査者の質問に答える形でインタビューを実施した。この制作とインタビューを1セットとして、3回行い、最後に振り返りインタビューを実施した。協力者の作品制作という時間的経験について、協力者自身が語ったその語りをテキストとして、分析枠組みによって分析し、考察することでその経験を明らかにするものである。

第Ⅲ章 調査結果から導かれる自己理解プロセス

本調査の分析結果から、自分の制作過程や作品について語ることによって自己理解を獲得していく構造は、概ね次のように明らかになった。自己理解のプロセスは2つに分類できる。選択する断片のスタイルから自己理解を獲得していくタイプ(A群)と画面を再構成するスタイルから自己理解を獲得していくタイプ(B群)である。いずれの場合も、語ること自体による自己の意識化と3人の私という視点の複数化による自己の客観化に支えられて、制作や作品スタイルを隠喩として、その背後に隠されたものを創造的に解釈することを通じて自己理解に至る。隠喩としての制作過程や作品を創造的に解釈することは、発見した制作・作品スタイルの隙間を直観による記憶や予想など自分の背景で埋めて一つ

の物語を作る中で、その時に浮かび上がる直観的な記憶や予想・期待に気づき、更にそこから自分の過去や現在や未来に向き合い、自己理解へと繋がる。

第IV章 語りから分かること、イメージから分かること

以上のように調査結果から言葉の物語化に焦点をあてた自己理解プロセスが導き出されたが、協力者の語る言葉による物語と、調査者が作品イメージから読み取れるイメージの物語とにズレが生じることも調査結果から分かったことである。制作過程で非言語的イメージの物語には、言葉にならないものを照らし出すことができる。しかし同時に制作活動においては物語化する自己を意識し難いということも事実である。これらが非言語的コラージュ表現の重要性（文脈切断的衝突）でもあり、3項構造（制作者と作品と教師）の中で、子ども達の語りと表現されたイメージの印象とのズレや矛盾に表れる子ども自身の直面する問題をどのように受け止め教育に生かすか教師の役割が問われるところでもある。

第V章 総合考察

物語化というのは、隙間を自分の直観的な記憶や予想で埋めることであるが、言葉で語ることで初めて表れるものではない。それ以前の身体的制作過程である行為と内的手本との対話的やりとりの構造にすでに見られるものである。すなわち身体的制作過程の対話的やりとり自体も言葉による物語化における創造的解釈と同じく画面のズレや隙間を埋めて一つの作品、すなわち一つのイメージの物語にすることである。ズレや隙間を埋めるものは、言葉の物語化の場合が直観による記憶や予想などの表象であるのに対して、制作の場合は実際の制作行為と内的手本との対話的やりとりから生まれる直観的な記憶を基礎にした場面の先取りと予想という表象である。この表象は無意識のような言葉にならないものを含むものである。このように身体的制作過程の対話的やりとりの構造は、言葉で物語る時の創造的解釈の構造の先取りとも言えるもので、両者に似た構造を見ることができる。

この対話的やりとりの構造は、3歳くらいの子どもの憧れる人への投影と取入れを伴う同一化の手段としての模倣表現と、そうした身体的行為を通じた自己意識化の獲得にも見ることができる。本調査によって見出されたA群（選択する断片から自己理解へ）は投影が顕著に表れ、B群（画面構成のスタイルから自己理解へ）は取り入れが顕著に表れる自己意識化の過程を示すものである。この自己意識化の準備は更にさかのぼって、生後6ヵ月くらいからの幼児の情動表出と、分かり難い情動表出の隙間を埋めながらその行為を創造的に読み解く大人の対応との対話的やりとりから始まっている。コラージュ制作過程に見られる自己認識の構造は、ずっと以前から模倣表現や情動表出などの形で言語使用に先立つ身体的行為の対話的やりとりによって準備されており、人間が社会的に開かれた他者（他者性）とのやりとりを通じて、身体的に自己認識する構造の原型と考えることができる。

以上のように表現活動の身体的制作活動の中には、すでに物語化というもう一つの表現活動が分かちがたく入っていて、物語を作りながら作品を作っていると考えられる。そのため、作ることと語ることとははっきりと分けることができない。制作も言葉による物語化も、実は対話的やりとりと創造的解釈という似た構造を持って連続した活動を構成しているからである。

今まで表現と鑑賞という二項対立で考えられてきた美術教育の実践において、イメージ制作過程全体の中に自己作品の鑑賞という言葉による物語化を組み込むことは、制作における普通なら意識化されにくい無意識を含んだ対話的やりとりに、制作を振り返る中で言葉による物語化という意識化しやすい創造的解釈をつなげることである。言葉による物語化というある種の鑑賞教育の重要な要素を制作過程に組み入れることによって、美術教育は「生きる力」を育む重要な要素である精神的自己理解という教育目標を担うことができ、美術教育における制作活動を「生きる力」という生きる場全般へと開かれたものとするのが期待できる。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 松 田 康 子
副 査 教 授 佐 藤 公 治
副 査 教 授 田 中 孝 彦 (武庫川女子大学)
副 査 教 授 長 田 謙 一 (首都大学東京)

学位論文題名

美術教育における制作過程から見た自己理解の探求

－コラージュ画制作経験調査の検討から－

本論文の目的は、美術教育が「生きる力」を育むことにつながる自己理解を担う教育であることについて理論的根拠をもとに明らかにするものである。

本論における問題意識は、美術教育と関連領域である芸術療法に関する先行研究の精査のもと立ち上げられている。美術教育現場、芸術療法における実践は、表現活動と鑑賞とを連動させ、そこに生じる対話の成立が自己探求や自己理解につながるという教育効果、治療効果、自己治癒力（生きる力）の賦活を実証している。しかし、いずれもその対話がどのようなプロセスと構造によって自己理解につながるかについては、じゅうぶんな検討がなされていないことを本論で指摘している。また、学習指導要領の一般方針でもある「生きる力を育む」という目標に対して、明確につながるビジョンが美術教育において示されていないことも、問題意識の背景においている（序章）。

これらをふまえ、自己理解とは自己意識化と自己の生き方の探究と定義したうえで、本論では、身体的制作行為により、どのように作品がつくられ、その作品はどのように自らの意図を超えて新しい自己の発見（自己理解）へつながるのかを解明するため、コラージュ制作経験調査を実施した。

コラージュ制作とは、既存の印刷物を切って、分断化し、貼って再構成することにより、新たな作品を創り出す過程である。コラージュ制作経験調査では、このコラージュ制作と制作後インタビューを1セットとして計3セットの制作・調査を行い、最後に全過程の振り返りインタビューを行う設計で行っている。制作はマガジンプクチャー法、相互法（調査協力者が制作中に並行して調査者も制作する）によって行われ、調査協力者は20-30歳前後の12名であった。データはコラージュ作品、インタビューデータ、調査者の調査時メモである。

分析方法は、モーリス・メルロー＝ポンティの表現論、スタイル論、ポール・リクールの物語論、アンリ・ワロンの発達理論から得た知見をつなぎ、整理をしたうえで分析枠組みを導き出し、それを基に、質的なデータ分析を行った。導かれた分析枠組みは、制作と作品受容と自分の生きる背景の気づきという（創造的解釈）、制作過程の語りの循環のなかにみる、「3人の私」として呈示されている。「制作する第1の私」、「生活する第2の私」、「制作全体を語る語り手である第3の私」である。この分析枠組みの呈示が本研究の分析の要となっている。3人の理論家をつなぐ発想からはじまり、自己理解につながるプロセスの分析枠組みをここで提示したことは、挑戦的な試みとして評価されるところである（第1章）。

上記の分析枠組みによる分析を通し、自己理解を獲得するプロセスは、語り手である第3の私が、

コラージュを制作する第1の私や作品について物語化することを通じて、第2の私である自分自身に気づいていくことであるとの結論に達した。さらに自己理解のプロセスは大きく2つのタイプに分類された。選択して断片化する時の内的手本が主導権をもって制作を進め、制作された作品スタイルから自己理解を獲得していくタイプ（A群）と、断片化したものを再構成して画面を作るときの内的手本が主導権を持って制作を進め、その制作・作品スタイルから自己理解を獲得していくタイプ（B群）である。「切って」、「貼る」コラージュ制作において、前者の文脈の切断、断片化に主たる特徴が見いだされるタイプと、後者の構成化に主たる特徴が見いだされるタイプと言い換えることができる。つまり投影法としてのコラージュと構成法としてのコラージュ、両者の機能がここに導き出されたといえる。これはコラージュ制作の特性を捉えた意義ある発見といえる。

A群の自己理解プロセスは、断片それぞれを隠喩として創造的に解釈し、断片と断片の隙間を埋め筋立てようとし、物語化しながら、そこで浮かび上がる記憶や予想や直感から過去、現在、未来に連なる自分の意識化へ、つまり生きる第2の私についての理解へ繋がっていくというものであった。もう一方のB群の自己理解プロセスは、自分の制作・作品スタイルを一つの隠喩として、ズレや隙間を埋めるという断片化したものの再構成を通して、第2の私のスタイルの物語を作っていた。そこに、時間的に連なり続ける私の生きるスタイルが意識化されていた。両群ともにコラージュ制作経験について語ることが自己理解につながるのは、3人の私という視点の複数化による自己の客観化と、語ること自体による自己の意識化に支えられて、断片、制作・作品スタイルを一つの隠喩として創造的に解釈するからであることが示されている。ここから、コラージュ画が、画面の断片と断片、位相の異なるスタイル間の、ズレ・隙間の気づきを制作の前提としていることの現代的な意味へと論考は深められている（第Ⅱ章、第Ⅲ章）。

分析はさらに、相互法ゆえ調査者の存在がもっとも影響を与えた印象が残る一事例をとりあげて、語られなかった表現そのものが物語るもの、そして、制作・作品—制作者（調査協力者）—教育者・教師（調査者）の3項構造を視点においた自己理解のプロセスにかかる議論が展開している。美術教育における客観的な第3者である教師の役割について考えることを目的とした分析である。調査協力者が言葉で語ったポジティブな内容に対して、調査者が作品から受けた印象は緊張や不安感が記されており、両者には大きなズレが生じていた。本論では、ここにこそ美術教育としての営みの可能性を見出していく糸口があることが論じられており、総合考察における重要な提言へつながっている（第Ⅳ章）。

総合考察では、本調査を経たうえでより明らかになってきた分析枠組み用語の整理を行い、最後に、イメージの物語化から言葉による物語化へつなぐ対話的やり取りにおける美術教育の実践と教師の役割を論じ、「生きる力を育む」自己理解を担う美術教育への提言をまとめた。

現代における美術教育を議論する際、現代人にマッチした方法ともいえるコラージュ制作に着目し、自らの実践を踏まえ、調査に取り入れた点は本研究の独自性として評価される。であるがゆえに、コラージュ制作の持つ意味について、さらなる追及が待たれるところではある。本論文の要となる理論的整理の水準に関しては、評価できるものではあるが、現段階においていくつかの課題を残したと言わざるを得ない。分析では、やや言語や物語に偏った分析となり、表現行為そのものが物語ることについての考察が不十分であることも、今後の課題として残った。しかし、緻密な調査と分析に基づいて理論的根拠をもとに具体的なビジョンを美術教育への提言としてまとめあげた本論の試みとその成果は、十分に意義あるものと評価できる。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。